

宮古湾海戦の雄『甲賀源吾傳』

石橋絢彦著

付函館戦記

ざるべけんや（小笠原子爵「帝國海軍史論」）

回天艦の來襲に遭ふ

元帥伯爵 東郷平八郎

-(104)-

明治二年春、陸中の宮古湾に於いて行はれた幕府の軍艦と官艦との激戦は、わが歐式海軍の最初の戦闘として帝国海軍史の重要な頁をなすものである。

此の海戦は、戊辰の乱に函館に脱走した榎本武揚の部将回天艦長甲賀源吾が官軍の優秀艦、甲鐵艦捕獲を策し、折から征討の途にある官軍艦隊が宮古湾に集合しているところを襲い、壮烈なる接舷攻撃を敢行して、わずか三十分程の間に両軍の死傷百余名を出したほど激烈を極めたものであった。

本書は灯台建築の権威として知られた故石橋絢彦工学博士がこの宮古湾襲撃の慘悲壯な戦死を遂げた回天艦長甲賀源吾の詳しい伝記、並びに薩長の幕末の形勢と函館戦争を記したもの。甲賀源吾の嗣子甲賀宣政博士が上梓したもので、わが洋式海軍の播磨時代の有様を審査に伝へまた幕府滅亡の消息を豊富な史料によつて記している点に於いて史家の参考に資する所大なるものがある。

内容見本

(67%縮小)

明治二年私は三等士官で、春日艦に乗組んで居りました。甲鐵艦に率られ、春日、陽春、丁卯の四艦並に飛龍、豊安、戊辰、晨風の四運を出港しました。途中風波の難を避け、陸中宮古港として品川港を出港して居た際、端なくも賊艦回天の來襲に遭ひ、舷々、相摩の大血戦を演じた事がある。賊艦回天艦長甲賀源吾は賊ながらも、六十年後の今日に至るまで、私の歎賞措く能はざる勇士である。當時年齢

僅かに三十一歳の壯年であつて、幕府の海軍に出仕してより既に七年の實驗を積み、沈毅寡言の膽略家であった。幕府の海軍總督榎本釜次郎の片腕と頼れたる武士であつた。榎本艦隊が品川湾を脱して北航せる際は、軍艦四隻、運送船一隻より編成されてあつたが、其後異變續出し、翌二年の春に於て役に立つのは回天、蟠龍、高雄のみとなつた。そこで甲鐵艦を海上に要して、之を捕獲するの策を定めた。(中略) 這般の計略のありとは夢にも知らぬ官艦の兵員は、三月二十五日午前四時半總員起床の鼓音(鼓音と拂曉)に目を覺して起出でた。乗組士官の多くは尙華胥の國に遊んで居つた(中略) 折しも一橋一烟突の一艦が米國軍艦旗を明渡る空に譲しつゝ進んで來た。我が各艦の乗組員は上甲板に集つて、投錨

-(105)-



今回の復刻版の装幀です(デザイン・毛利一枝)

回天艦長甲賀源吾傳

石橋絢彦著

限定三百部復刻



狼狽名状すべからざるものあれども、合旗を擧げて汽罐に點火せしむる等の命令を發せり。橋上に在りし安藤太郎は腕を貫かれ、ニコール氏は大腿を傷く。皆病室に入りて治療を加へしめ、司令官は船首に往きて指揮す。

回天艦員の奮戦

接舷攻撃はニコール氏講義の如く我が舷端數所より一齊に躍り込み銃を發する暇なからしむるに在り。今は甲鐵へ躍り込むべき一路あるのみ。且つ甲鐵の甲板は我が舷より一丈も低き故身體輕捷の者に非ざれば飛込み難し。又敵は舷側に隠れ銃鎗を以て我を衝く故、容易に乗り移り難し。乃ち各分隊順序を以て躍り込む事と爲し、司令官の侵入せよと令するや、一番分隊長一等測量大塚波次郎刀を揮ひ一番と叫びて甲鐵へ躍り込みたり。大塚は豫て此戦は一分時も猶豫を許さず、隊士相顧み相率ゐるを待たば機を失はん、諸君我に従ひて先登を努められよと激励せしが、今其言を實行したり。次で新撰組野村理三郎、彰義隊差圖役笹間金八郎、同差圖下役加藤作太郎等乗り移ると雖も、敵はガットリング、ゴンと稱し野戰速

射砲の如く、車臺に六英寸砲を載せ、筒尻の機械を運轉し、ニール銃弾二倍大の弾丸を一分間に百八十發を發射する優力なる砲を發する故、乗り移る者は打ちすぐめられ、大塚其他大概殞されたり。彰義隊士伊藤彌七は甲鐵に躍り込んだ際如何にしけん帆に包まれながら敵數人を狙撃し、回天が甲鐵を離るゝ時飛還り微傷をも負はず、水兵渡邊某は大砲を扱ふ棍棒を携へ甲鐵へ飛び入り、棒を揮うて數人を倒し、歸艦の時に追はれて刀を以て斬り付けられしに、着衣を切られたるも身體に負傷せず。蓋し生還を得たる者は此二人のみ。二番分隊長軍艦役一等士官矢作沖麿(初名平三郎)船首に在り。短銃を以て敵を斃したりとて得意なりしが、將に刀を抜き甲鐵に躍り込まんとする刹那、一彈胸に中りて伏す。勇を鼓して起たんとする時、兩眼を射られて斃る。軍艦役並渡邊大藏、見習一等筒井專一郎は詰所にて即死し、見習二等布施半(初、孫三郎)は一丸腕を貫き、一丸腹に中り、函館に還りて死す。見習二等砲手小幡忠甫(初、一郎)は即死、其傍に在りし四十斤砲掛り三浦功は無事なりき。船首に在りし神木隊長酒井良祐は右腕に負傷し、神木隊士三宅八五郎、川島金次郎、古橋丁藏、酒井鋤之助(良祐子十六歳)は彈中にて死し、相馬主計、陸軍奉行添役



懐かしい書物

作家 中村 彰彦

石橋絢彦撰『回天艦長甲賀源吾傳』は、昭和初期に出版された歴史書としては貴重な特徴をいくつも備えている。

第一に活字が大きく、組版がゆったりしていて、版面が美しく、大変読みやすいこと。第二に、ところどころに挿入されている写真や図版も鮮明であること、などである。

以上は視覚的な事柄たか 編集もどても丁寧になされているので、ます
「本傳」「外編」「附録」の三部から構成されている本書の内容を把握してお
こう。

【本傳】はいうまでもなく甲賀源吾の個人史を語つたりであり、この主人公が天保十年（八三九）正月三日、遠州掛川藩の旗奉行甲賀孫太夫秀孝の第四子として生まれたことから書き起こされる。安政五年（八五八）二十歳にして前年に新設されたばかりの海軍操練所に入つた源吾は、航海術を学んで幕府海軍の草分けのひとりとなつていつた。

【本傳】はいうまでもなく甲賀源吾の個人史を語つただりであり、この主人公が天保十年（一八三九）正月三日、遠州掛川藩の旗奉行甲賀孫太夫秀孝の第四子として生まれたことから書き起こされる。安政五年（一八五八）二十歳にして前年に新設されたばかりの海軍操練所に入つた源吾は、航海術を学んで幕府海軍の草分けのひとりとなつていつた。

同六年、幕臣に採り立てられて、軍艦操練方手伝出役てつだいしゃぢゆく、三等士官に任命されたことにより、源吾は測量学、海上戦法、造船学等のプロとして人生を歩みはじめるのだ。江戸湾の測量、小笠原諸島への出張、十四代將軍徳川家茂いえもちの送迎などで場数を踏んだ源吾は、もしも平和な世に生まれあわせていれば、七つの海を航海することもできたであろう。

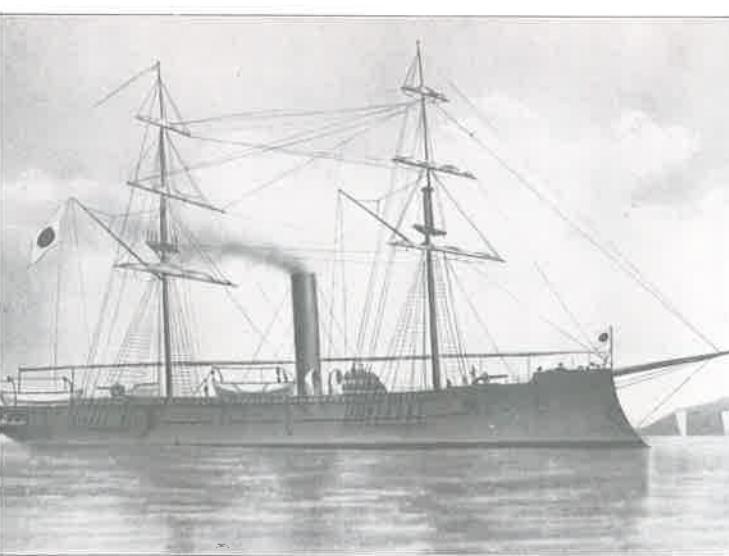
しかし、當時の幕府はすでに末期症状を呈していた。慶応四年（一八六八）四月十一日、薩長両藩を主体とする討幕軍は、江戸城に無血入城。五月二十四日、徳川家の十六代目徳川家達は駿河、遠江、陸奥のうちに七十万石を与えられる身となつたが、その七十万石では旧幕臣とその家族四十万人をとても扶養できない、という大問題が出来した。

海戦がこれである。

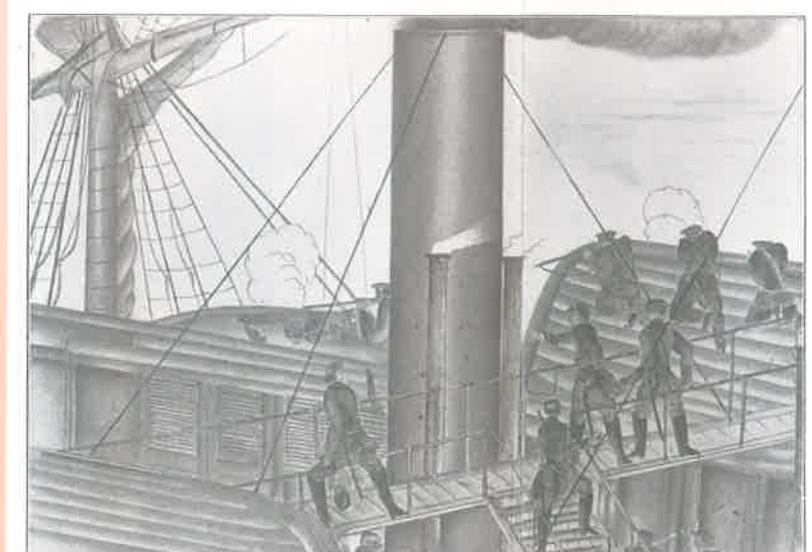
龍は遅れ、高雄は機関が故障して、回天は単独で宮古湾へ侵入せざるを得なくなつた。

—源吾曰く、我一艦ど雖も、以て敵を破るに足れりと。曉霧に乘じ星旗を掲げて以て進む。星旗は米国の徽なり。既にして甲鉄に近づき、乃ち旭旗を樹つ。舵を捩ぢて横に衝く。源吾予め死士を揃え、舷の接するを待ちて躍り入らしむ。是に至りて甲鉄は下丈余にあり(からだを)投下すべからず。衆逡巡す。源吾刀を揮ひて叱咤す。大塚波次郎声に応じて先づ投ず。衆相繼ぎて下り、縦横奮撃す。(略)源吾乃ち巨礮を轟かして甲鉄を俯撃す。官兵快礮を以て、(回天の)艦橋を急射す。源吾身数傷に中り遂に斃る

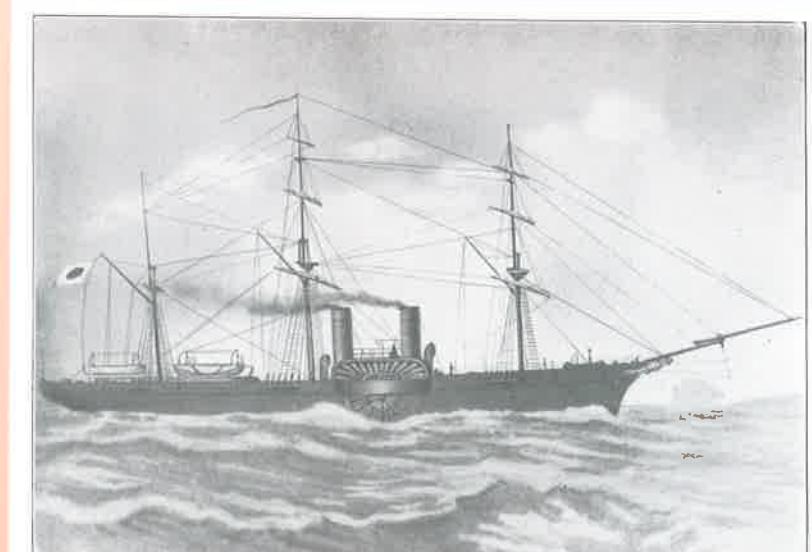
回天から接舷攻撃を仕掛けられた甲鉄は、甲板上に「快礮」すなわち毎分百八十発の弾丸を撃ち出すことのできる機関銃の原型ガットリング機関砲を据えつけていた。その速射を浴びて、甲賀源吾は三十一歳の生涯を閉じたのである。



卷之三



左よりニコール、安藤太郎、荒井郁之助、甲賀源吾（原圖は安藤太郎筆）



幕府軍艦回天

(表紙の写真も含めすべて本書より)

つぎなる「外編」は「幕末の形成と函館戦記」と題されていて、文久年間（八六一～六四）の政情から明治二年五月十八日に榎本武揚が五稜郭を開城し、明治政府に降伏するまでを詳述する。「本傳」と「外編」とを併せ読むことにより、甲賀源吾の人となりとその生きた時代とが立体的に理解できるよう工夫されているのは、撰者の石橋絢彦が工学博士であるため、この書物を一種の建築物として構想したことと思われる。

また、最後の「附録」は蝦夷地政府の海軍奉行として源吾と共に回天に座乗していた荒井郁之助の遺稿「回天丸の前身ダンジック号」、旧幕府海軍總裁だった矢田堀鴻の年譜、荒井郁之助の略伝、函館に蝦夷地政府軍戦没者を祀る碧血碑が建立された次第を述べた「碧血碑と記念碑」の四編から成つていて、戦争とは慰靈におわるものであることを端的に示している。

本書は以上のようによく目配りの行き届いた史書であり、幕末・維新史、とくに榎本艦隊の江戸脱走から蝦夷地政府の成立と崩壊までのプロセスに関する向きには是非お薦めしたい好著でもある。

私個人のことをいえば、本書の存在に初めて気づいたのは、三十七歳にして、いずれデビュー作となる百枚の小説『明治新選組』を構想したときのことであった。主人公の新選組隊士相馬主計も回天に乗組み、宮古湾海戦に参加したため、その史料を集めうるうちに本書を知ったのである。

それから四半世紀の歳月が流れてしまつたが、ある人からコピーを頂戴した本書は、いつも私の机のかたわらにあつた。『遊撃隊始末』（文春文庫）によつて榎本軍に参加した伊庭八郎や人見勝太郎の生涯を描いたときには、宮古湾海戦や函館湾海戦における回天の奮闘に言及せざるを得なかつた。さらに、昨年出版した『軍艦「甲鉄」始末』（新人物文庫）を書いていた間も、本書を読み返す必要があつたためである。

前述のように私の架蔵しているのは本書のコピーにすぎなかつたが、このたび堅牢にして美麗な装丁で知られるマツノ書店が本書を復刻する運びだといふ。いまでは読み返すたびに懐かしくさえある本書がふたたび世に出、あらたな読者を獲得することを喜ばずにはいられない。

三 次	本 伝	甲賀源吾伝
第一章 家系	(1) 家系と生誕、(2) 甲賀家略系譜	
第二章 修学	(1) 江戸に出てで蘭学を学ぶ、(2) 幕府海軍（蘭式）の起原、(3) 海軍に志し航海術を学ぶ、(4) 軍艦朝陽長崎に回航せらる、(5) 小笠原島の沿革、(6) 小笠原島渡航当時の状況、(7) 小笠原島の領有権	
第三章 始めで幕府に仕ふ	(1) 幕府海軍へ出仕し操練教授方となる、(2) 江戸湾を測量す、(3) 江戸湾其他測量の始末、(4) 回天艦長中賀源吾傳、(5) 江戸原人島出張	
第四章 無人島出張	(1) 千秋丸にて小笠原島に渡航す、(2) 千秋丸小笠原島廻航の用向、(3) 千秋丸乗組の諸役、(4) 千秋丸発航の模様、(5) 小笠原島の沿革、(6) 小笠原島渡航当時の状況、(7) 小笠原島の領有権	
第五章 幕府海軍の拡張	(1) 海軍拡張の趨勢、(2) 幕府大軍艦開陽丸を和蘭に注文す、(3) 開陽丸の回航、(4) 将軍警衛及上使護送	
第六章 将軍警衛及上使護送	(1) 将軍の上洛を警衛す、(2) 朝賀丸にて上使を長州へ護送す、(3) 小倉長州二藩への上使の使命と其最後、(4) 上使護送中の消息、(5) 将軍の帰東に供奉す、(6) 奇捷の退去命令、(7) 奇捷に対する幕府の態度、(8) 奇捷の勅書に対する幕府の態度、(9) 奇捷の撤退	

三 次	第七章 英国式海軍の伝習	第八章 昇進・脱走・戦死	第九章 性格と家名の再興	第十章 海軍史家の論評	第十一章 政権奉還後の徳川氏の始末	第十二章 幕艦の北走	第十三章 官軍の北征	第十四章 脱走軍の函館占領	第十五章 函館平定	第十六章 両軍記録の対照	第十七章 官軍の函館進撃	第十八章 脱走軍の北進	第十九章 脱走軍余聞	第二十章 体裁	第二十一章 予約特価	第二十二章 特価締切	第二十三章 刊行	第二十四章 限定三百部	第二十五章 体裁
	(1) 幕府海軍伝習所生徒取締を命ぜらる、(2) 幕府英人より海軍伝習を開始す、(3) 海軍伝習所（英式）の組織、(4) 軍艦頭並に昇進す、(5) 宮古港海戦と官軍側の記事、(6) 宮古港海戦へ脱走す、(7) 宮古港にて戦死す、(8) 静岡藩へ藩籍入願書及其指令書、(9) 相続人の実父三見氏治自叙伝、(10) 同補遺	(1) 軍艦頭並に昇進す、(2) 函館へ脱走す、(3) 宮古港にて戦死す、(4) 宮古港海戦と官軍側の記事、(5) 宮古海戦へ脱走す、(6) 宮古港にて戦死す、(7) 宮古港へ藩籍入願書及其指令書、(8) 性格と家庭、(9) 家名の再興、(10) 家茂の薨去と慶喜の継立、(11) 家の後継選定、(12) 延喜の木に上陸す、(13) 延喜を遣はし長藩を貰す、(14) 延喜の西奔、(15) 岡谷鉢吾の見たる長幕の背馳、(16) 長藩士の犯闕、(17) 幕府海軍最初の軍事行動、(18) 家茂の薨去と慶喜の継立、(19) 長藩士の犯闕、(20) 幕府海軍最初の軍事行動、(21) 停戦の勅命、(22) 薩摩討伐と品川海争、(23) 摂海の海戦、(24) 伏見・鳥羽戦争、(25) 延喜の海戦、(26) 伏見・鳥羽戦争、(27) 明治元年春夏の江戸の形勢、(28) 徳川家	(1) 甲賀源吾君の人となり、(2) 元海軍奉行荒井郁之助	(1) 欧式海戦の嚆矢、(2) 海軍中将子爵小笠原長生、(3) 回天艦の米襲に遭ふ、(4) 元帥伯爵東郷平八郎	(1) 大政奉還後の徳川家の政治組織、(2) 恭順の條件の経緯、(3) 徳川氏待遇法の決定、(4) 新封土十萬石と幕臣の去就、(5) 新封土内諸侯の移封、(6) 幕臣の新封土移転、(7) 幕臣陸軍脱走の状況（新撰組、彰義隊）	(1) 幕艦北走の近因、(2) 旧時の蝦夷地管理、(3) 嘉永後の樺太境界問題と函館防備、(4) 幕府蝦夷地を朝廷へ奉る、(5) 清水谷公考艦夷の版図を受取る、(6) 脱艦函館夷の難破、(7) 矢田堀海軍総裁の白重、(8) 美嘉保丸の最後、(9) 咸臨丸の難破、(10) 榎本艦隊、仙台夷の敵襲を容れず、(11) 榎本蘭人領より蝦夷に向ふ、(12) 榎本の函館の献策を容れず、(13) 官軍の奥に赴きたる遠因、(14) 脱艦の奇しき運命、(15) 脱艦の奇しき運命	(1) 噴火湾鷲の木に上陸す、(2) 松前攻撃、(3) 開陽艦の末路、(4) 外國領事への通知書、(5) 蝦夷平定祝賀会、(6) 英仏両艦との交渉、(7) 両艦長に托したる上奏文、(8) 諸役を投票にて選定す、(9) 官軍の海路北進、(10) 軍医の見えたる官軍の進退、(11) 官幕両海軍の実力、(12) 両艦長に托したる上奏文、(13) 官軍の海路北進、(14) 軍医の見えたる官軍の進退、(15) 官幕両海軍の実力、(16) 官軍の海路北進、(17) 両艦長に托したる上奏文、(18) 官軍の海路北進、(19) 両艦長に托したる上奏文、(20) 官軍の海路北進、(21) 両艦長に托したる上奏文、(22) 官軍の海路北進、(23) 両艦長に托したる上奏文、(24) 官軍の海路北進、(25) 両艦長に托したる上奏文、(26) 官軍の海路北進、(27) 両艦長に托したる上奏文、(28) 官軍の海路北進、(29) 両艦長に托したる上奏文、(30) 官軍の海路北進、(31) 両艦長に托したる上奏文、(32) 官軍の海路北進、(33) 両艦長に托したる上奏文、(34) 官軍の海路北進、(35) 両艦長に托したる上奏文、(36) 官軍の海路北進、(37) 両艦長に托したる上奏文、(38) 官軍の海路北進、(39) 両艦長に托したる上奏文、(40) 官軍の海路北進、(41) 両艦長に托したる上奏文、(42) 官軍の海路北進、(43) 両艦長に托したる上奏文、(44) 官軍の海路北進、(45) 高雄艦員の処分、(46) 宮古港戦蹟碑の原文、(47) 宮古港戦蹟碑の原文、(48) 千代田形捕獲の記録、(49) 月四日戦況の記録、(50) 二日の海戦と両軍の記録、(51) 月四日戦況の記録、(52) 二日の海戦と両軍の記録、(53) 月四日戦況の記録、(54) 月四日戦況の記録、(55) 月四日戦況の記録、(56) 月四日戦況の記録、(57) 月四日戦況の記録、(58) 月四日戦況の記録、(59) 月四日戦況の記録、(60) 月四日戦況の記録、(61) 月四日戦況の記録、(62) 月四日戦況の記録、(63) 月四日戦況の記録、(64) 月四日戦況の記録、(65) 月四日戦況の記録、(66) 月四日戦況の記録、(67) 月四日戦況の記録、(68) 月四日戦況の記録、(69) 月四日戦況の記録、(70) 月四日戦況の記録、(71) 月四日戦況の記録、(72) 月四日戦況の記録、(73) 月四日戦況の記録、(74) 月四日戦況の記録、(75) 月四日戦況の記録、(76) 月四日戦況の記録、(77) 月四日戦況の記録、(78) 月四日戦況の記録、(79) 月四日戦況の記録、(80) 月四日戦況の記録、(81) 月四日戦況の記録、(82) 月四日戦況の記録、(83) 月四日戦況の記録、(84) 月四日戦況の記録、(85) 月四日戦況の記録、(86) 月四日戦況の記録、(87) 月四日戦況の記録、(88) 月四日戦況の記録、(89) 月四日戦況の記録、(90) 月四日戦況の記録、(91) 月四日戦況の記録、(92) 月四日戦況の記録、(93) 月四日戦況の記録、(94) 月四日戦況の記録、(95) 月四日戦況の記録、(96) 月四日戦況の記録、(97) 月四日戦況の記録、(98) 月四日戦況の記録、(99) 月四日戦況の記録、(100) 月四日戦況の記録、(101) 月四日戦況の記録、(102) 月四日戦況の記録、(103) 月四日戦況の記録、(104) 月四日戦況の記録、(105) 月四日戦況の記録、(106) 月四日戦況の記録、(107) 月四日戦況の記録、(108) 月四日戦況の記録、(109) 月四日戦況の記録、(110) 月四日戦況の記録、(111) 月四日戦況の記録、(112) 月四日戦況の記録、(113) 月四日戦況の記録、(114) 月四日戦況の記録、(115) 月四日戦況の記録、(116) 月四日戦況の記録、(117) 月四日戦況の記録、(118) 月四日戦況の記録、(119) 月四日戦況の記録、(120) 月四日戦況の記録、(121) 月四日戦況の記録、(122) 月四日戦況の記録、(123) 月四日戦況の記録、(124) 月四日戦況の記録、(125) 月四日戦況の記録、(126) 月四日戦況の記録、(127) 月四日戦況の記録、(128) 月四日戦況の記録、(129) 月四日戦況の記録、(130) 月四日戦況の記録、(131) 月四日戦況の記録、(132) 月四日戦況の記録、(133) 月四日戦況の記録、(134) 月四日戦況の記録、(135) 月四日戦況の記録、(136) 月四日戦況の記録、(137) 月四日戦況の記録、(138) 月四日戦況の記録、(139) 月四日戦況の記録、(140) 月四日戦況の記録、(141) 月四日戦況の記録、(142) 月四日戦況の記録、(143) 月四日戦況の記録、(144) 月四日戦況の記録、(145) 月四日戦況の記録、(146) 月四日戦況の記録、(147) 月四日戦況の記録、(148) 月四日戦況の記録、(149) 月四日戦況の記録、(150) 月四日戦況の記録、(151) 月四日戦況の記録、(152) 月四日戦況の記録、(153) 月四日戦況の記録、(154) 月四日戦況の記録、(155) 月四日戦況の記録、(156) 月四日戦況の記録、(157) 月四日戦況の記録、(158) 月四日戦況の記録、(159) 月四日戦況の記録、(160) 月四日戦況の記録、(161) 月四日戦況の記録、(162) 月四日戦況の記録、(163) 月四日戦況の記録、(164) 月四日戦況の記録、(165) 月四日戦況の記録、(166) 月四日戦況の記録、(167) 月四日戦況の記録、(168) 月四日戦況の記録、(169) 月四日戦況の記録、(170) 月四日戦況の記録、(171) 月四日戦況の記録、(172) 月四日戦況の記録、(173) 月四日戦況の記録、(174) 月四日戦況の記録、(175) 月四日戦況の記録、(176) 月四日戦況の記録、(177) 月四日戦況の記録、(178) 月四日戦況の記録、(179) 月四日戦況の記録、(180) 月四日戦況の記録、(181) 月四日戦況の記録、(182) 月四日戦況の記録、(183) 月四日戦況の記録、(184) 月四日戦況の記録、(185) 月四日戦況の記録、(186) 月四日戦況の記録、(187) 月四日戦況の記録、(188) 月四日戦況の記録、(189) 月四日戦況の記録、(190) 月四日戦況の記録、(191) 月四日戦況の記録、(192) 月四日戦況の記録、(193) 月四日戦況の記録、(194) 月四日戦況の記録、(195) 月四日戦況の記録、(196) 月四日戦況の記録、(197) 月四日戦況の記録、(198) 月四日戦況の記録、(199) 月四日戦況の記録、(200) 月四日戦況の記録、(201) 月四日戦況の記録、(202) 月四日戦況の記録、(203) 月四日戦況の記録、(204) 月四日戦況の記録、(205) 月四日戦況の記録、(206) 月四日戦況の記録、(207) 月四日戦況の記録、(208) 月四日戦況の記録、(209) 月四日戦況の記録、(210) 月四日戦況の記録、(211) 月四日戦況の記録、(212) 月四日戦況の記録、(213) 月四日戦況の記録、(214) 月四日戦況の記録、(215) 月四日戦況の記録、(216) 月四日戦況の記録、(217) 月四日戦況の記録、(218) 月四日戦況の記録、(219) 月四日戦況の記録、(220) 月四日戦況の記録、(221) 月四日戦況の記録、(222) 月四日戦況の記録、(223) 月四日戦況の記録、(224) 月四日戦況の記録、(225) 月四日戦況の記録、(226) 月四日戦況の記録、(227) 月四日戦況の記録、(228) 月四日戦況の記録、(229) 月四日戦況の記録、(230) 月四日戦況の記録、(231) 月四日戦況の記録、(232) 月四日戦況の記録、(233) 月四日戦況の記録、(234) 月四日戦況の記録、(235) 月四日戦況の記録、(236) 月四日戦況の記録、(237) 月四日戦況の記録、(238) 月四日戦況の記録、(239) 月四日戦況の記録、(240) 月四日戦況の記録、(241) 月四日戦況の記録、(242) 月四日戦況の記録、(243) 月四日戦況の記録、(244) 月四日戦況の記録、(245) 月四日戦況の記録、(246) 月四日戦況の記録、(247) 月四日戦況の記録、(248) 月四日戦況の記録、(249) 月四日戦況の記録、(250) 月四日戦況の記録、(251) 月四日戦況の記録、(252) 月四日戦況の記録、(253) 月四日戦況の記録、(254) 月四日戦況の記録、(255) 月四日戦況の記録、(256) 月四日戦況の記録、(257) 月四日戦況の記録、(258) 月四日戦況の記録、(259) 月四日戦況の記録、(260) 月四日戦況の記録、(261) 月四日戦況の記録、(262) 月四日戦況の記録、(263) 月四日戦況の記録、(264) 月四日戦況の記録、(265) 月四日戦況の記録、(266) 月四日戦況の記録、(267) 月四日戦況の記録、(268) 月四日戦況の記録、(269) 月四日戦況の記録、(270) 月四日戦況の記録、(271) 月四日戦況の記録、(272) 月四日戦況の記録、(273) 月四日戦況の記録、(274) 月四日戦況の記録、(275) 月四日戦況の記録、(276) 月四日戦況の記録、(277) 月四日戦況の記録、(278) 月四日戦況の記録、(279) 月四日戦況の記録、(280) 月四日戦況の記録、(281) 月四日戦況の記録、(282) 月四日戦況の記録、(283) 月四日戦況の記録、(284) 月四日戦況の記録、(285) 月四日戦況の記録、(286) 月四日戦況の記録、(287) 月四日戦況の記録、(288) 月四日戦況の記録、(289) 月四日戦況の記録、(290) 月四日戦況の記録、(291) 月四日戦況の記録、(292) 月四日戦況の記録、(293) 月四日戦況の記録、(294) 月四日戦況の記録、(295) 月四日戦況の記録、(296) 月四日戦況の記録、(297) 月四日戦況の記録、(298) 月四日戦況の記録、(299) 月四日戦況の記録、(300) 月四日戦況の記録、(301) 月四日戦況の記録、(302) 月四日戦況の記録、(303) 月四日戦況の記録、(304) 月四日戦況の記録、(305) 月四日戦況の記録、(306) 月四日戦況の記録、(307) 月四日戦況の記録、(308) 月四日戦況の記録、(309) 月四日戦況の記録、(310) 月四日戦況の記録、(311) 月四日戦況の記録、(312) 月四日戦況の記録、(313) 月四日戦況の記録、(314) 月四日戦況の記録、(315) 月四日戦況の記録、(316) 月四日戦況の記録、(317) 月四日戦況の記録、(318) 月四日戦況の記録、(319) 月四日戦況の記録、(320) 月四日戦況の記録、(321) 月四日戦況の記録、(322) 月四日戦況の記録、(323) 月四日戦況の記録、(324) 月四日戦況の記録、(325) 月四日戦況の記												